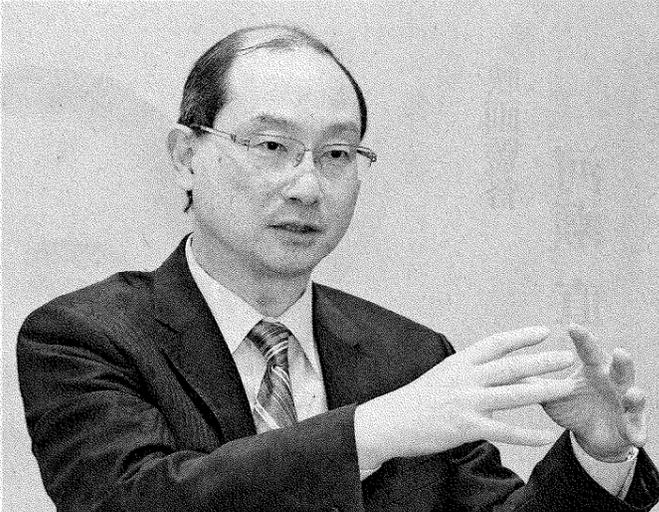


内戦の時代 日本に役割

どうしたら戦争をなくし、持続的な平和を達成できるのか。国連の日本政府代表部公使参事官なども務めた上智大教授・東大氏が、豊富な現地調査をもとに『内戦と和平』（中公新書）をまとめた。東氏は「新型コロナウイルスの感染が拡大しているが、こんな時こそ日本は世界にも目を向けるべきだ。日本にできることは多い」と話している。

新著では、イラク、南スーダン、アフガニスタンなどのケースを踏まえ、仲介者による「和平調停」活動を中心に紛争の解決法を考察した。まず示されるのは、現代は悲惨な「内戦」の時代であるということ。スウェーデンの大学の調査によれば、国家間の戦争は近年、ほとんどなくなっているが、内戦は毎年50件を超えている。そして毎年10万人前後が死亡し、計7000万人以上が家を追われている。

「行き当たりばったりなところもあるが、米トランプ政権は交渉による解決に非常に前向き。戦争をどンドンするよりは、ずっといい面もある」と話す東氏



「こうした状況が続くのは、第2次世界大戦後では初めて。難民は他国に流入し、受け入れ国での排斥運動も引き起こす。すべての国にとってひとつことではない」

当初は政府と反政府勢力の純粋な内戦だったものが、周辺国やグローバル大国の介入によって国際化している事例が多いことも示される。こうした内戦をどう解決していけばいいのか。東氏は、紛争が続いている段階での「和平交渉」と、停戦後の「平和構築」とで、考え方を分けて対処する必要があると強調する。つまり、戦闘を止める段階では現実的になり、有力な当事者の間だけで交渉し、合意をまとめる。そして停戦後の平和構築の段階になったら、包摂性を持って全当事者で合意をまとめることが重要だというのだ。

また、国際化した内戦の和平交渉は、関係する周辺国やグローバル大国が本気になって動かないと、うまくいかない。

東大作・上智大教授の新著 対話促進で平和貢献



昨年12月、米ニューヨークの国連本部で開かれた安全保障理事会の緊急会合

できないと指摘する。国連はこの時には力をあまり発揮できないという。逆に「紛争への介入をやめない周辺国などが、国連を利用する『国連の濫用』ともいえるべき事態が起きている」。そうした国は国連の仲介努力への支援などを表明し、平和に向けた努力をアピールすることが多いというが、「責任回避のために国連を使うべきではなく、周辺国・大国としての責任を認識すべきだ」と訴える。

他方で平和構築の段階では、国連は大きな役割を果たしている。影響力の大きい特定の国と違い、国連のような中立的な存在はスムーズに受け入れられるからだという。

こうした世界の中で、日本は対話促進するファシリテーターを目指すべきだと力を込める。これまでの国際支援

で、自国の利害を押しつけて中立的な姿勢を示してきたことなどから、中東やアフリカでは、独特の信頼感を持たれていると指摘。紛争状態にある双方の当事者に会って話ができる数少ない国の一つだという。東氏は「軍事的な力はないので調停者にまではなれないが、ファシリテーターの役割は十分に果たせると実感している。外交の柱の一つにするべきだ」と提唱する。

日本経済が伸び悩む現在、他国の援助に大金を使うべきではないという批判もありうるが、東氏は真つ向から反論している。中東地域の安定は、日本の安全保障に直結する。さらに内戦が少しでも減れば、温暖化や環境問題、そして感染症など地球規模の課題に対応する世界全体の力も上がっていく。「一回り回って日本のメリットになる」。加えて、ファシリテーターの役割を果たすために必要な費用は、関係者の旅費や宿泊費などで、インフラ支援と比べれば格段に少ないのだという。

東氏は、「病気を根絶できなくても死者を減らす努力を続けるのと同じように、日本人は世界平和のために努力し続けることが重要だ」と強調する。関与している姿を他国に認識してもらうこと自体がメリットなのだという。「新型コロナウイルスの感染拡大もあり、今の日本は激しく内向きになってきていると感じる。仕方がない部分があるが、日本が世界の中で生きていく上では、その姿勢を克服することも必要だ。外にも目を向けてほしい」

緒方洪庵の適塾で学び、長崎で蘭医ボンペに師事した長与専斎(1838-1902)は、1871年、明治政府の岩倉使節団に志願して渡米し、翌年には大西洋を渡ってロンドン、パリを経てベルリンに赴く。もとより先進国の医学教育や医療制度を实地に知るためである。

視察当初は「サニタリーや「ヘルス」、あるいはドイツ語で健康保護という章の「ゲントハイツプレーゲ」といったことをさかかんに耳にしても「ただ字義のままに解」するだけであって、これら語の背後に「国民一般の健康保護を担う」という健康行政組織があることを発見するに至る。後に「松本順自伝・長与専斎(自伝)平凡社東洋文庫」。

そして1875年、現在の厚生労働省へとながる内務省衛生局の初代局長となつた。

公衆衛生という語は、近代国家建設のために欠くことができない二つの観念が組み合わされている。とはいえ語彙としては、近代以前に「public」の訳語として急速に広まった公衆に比べて「衛生」は由来が古く、「荘子」に載せられた老子と「荘子の弟子の問答の中に「衛生之経」、つまり生命を守る不変の方法として見え、養生や摂生と類義の語であった。

ぶ媒体を減らすより良かったと思ふ。今後のモデルにしたい。

他方、感染の事象を捉えて正しく怖るるようには思えない。自分自身もあやういかに。

今の日本では感する法律も整備も現時点ではできても現時点では医学では説明できるからだろう。病気を科学的に説明できる

繰り返される疫病との闘い

力構図が入れ替わることもたびたびあった。 鎖国をしていたはずの江戸時代も、世界各地で繰り返



医学史家・酒井シヅ氏

返し流行していたインフルエンザやコレラが長崎などから何度も日本に入り、猛威を振るった。幕末が典型的だが、健全な政治が行われていない時には健康な社会も損なわれる。現代は昔と同じではないが、まったく関係がないとも言えない。

これだけ疫病に苦しめられてきたのに、人間には常におこりがあつた。疫病が沈静化すると克服したつも

りになり、すぐに忘れてしまふ。1918年に始まるスペイン風邪(インフルエンザ)は名前が珍しく、死者も多くて記憶に残っているが、大正期や昭和期にはほかにも様々な感染症がよっつう流行し、多くの人が亡くなっていたことは、忘れられている。

確かに、人々は少しずつ賢くはなっている。今回の新型コロナウイルスの感染拡大を見ても、外出自粛や手洗い励行といった行政からの要請に、多くの人が素直に従っている。学校が休校措置や在宅ワークなどの試みも、ウイルスを運

感染拡大が続く新型コロナウイルス。日本人が悩まされてきた疫病と比べればどう見えるのか。「病が語る日本史」(講談社学術文庫)の著書がある、医学博士で順天堂大特任教授(医学史)の酒井シヅ氏に写真に語ってもらった。

新型コロナ

日本人は古代から疫病に苦しめられてきた。結核、痘瘡(天然痘)、マラリア、麻疹、コレラ、ペスト……。そして、それらの疫病が政治に大きな影響を与えていた。権力者は大規模な祈禱をし、遷都や改元を行った。権

翻訳記事 齋藤